2007－09

札響くらぶ

第 40 号

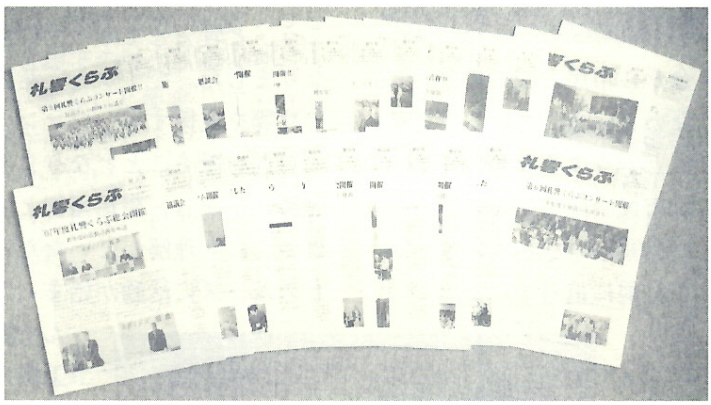
発行／札響くらぶ

(財)札幌交響楽団内

札幌市中央区中島公園1番15号
(札幌コンサートホール内)

「札響くらぶ」40号となる

記念の座談会を開催



「札響くらぶ」が、札響くらぶ発足前の準備号を経て、平成９年１月に創刊号を発行してから、40号となりました。今号では会長、副会長、事務局長による記念座談会を掲載します。（２ページ～５ページ）

準備号から40号までに「PLAYER'S TALK」や独奏者としてご紹介した楽員さんやステージスタッフは、準備号の土田英順さんから40号の山下友輔さんまで延べ75名に上ります。また、指揮者としてご紹介した方々は、秋山和慶、円光寺雅彦、高関健、故岩城宏之、尾高忠明、井上道義、山下一史、渡邉一正、小泉和裕、故山本直純、ベルンハルト・ギュラー、大山平一郎、西本智実、新田ゆり、下野竜也、梅田俊明、末廣誠、金聖響の錚双たる各氏(掲載順)で、尾高さんと高関さんには複数回ご登場願っています。また、ソリストとしてご紹介した方々は、藤川真弓(Vn)、舘野 泉(Pf)、三舩優子(Pf)、吉野直子(Hp)、竹澤恭子(Vn)、小山実稚恵(Pf)という、世界的にご活躍の皆さんです。

40号までには、幾つかの訃報を掲載しなければならないという悲しいこともありました。他のオーケストラでは例が無い「コンサート・リーダー」として、草創期の札響をリードされた戸沢宗雄氏、札響創設期から関わってこられた山本直純氏、そして、札響の初代音楽監督を務められた岩城宏之氏の訃報はまだ記憶に新しいところです。

一方、楽しい記事もたくさんありました。2001年の米国同時多発テロのため、同年10月～11月に予定されていた札響初の英国公演の実施が危ぶまれ、同行応援ツアーも中止になった中、敢然と追っかけを決行した女性二人の報告記事。札響東京公演への追っかけ記事。そして、仙台・山形への訪問記事などです。

また、現在も進行中の竹津宜男さんによる「札響物語」は札響の歴史や裏面を語る貴重な連載となっており、将来的には単行本としての出版も待たれますし、11号では付録として札響初の「楽員名鑑」も発行されました。

「札響くらぶ」40号記念座談会

札響くらぶの10年

札響くらぶ誕生から11年、会報「札響くらぶ」も記念の40号となりました。この機会に、札響くらぶの10年間の歩みを振り返る座談会を特集いたします。

ご出席は、上田文雄会長、鈴木美保、西川吉武、佐藤良次の３副会長、武藤義典事務局長の５氏。７月29日札幌市市長公館で収録しました。

佐藤　最初に、そもそもの札響くらぶ発足のいきさつを、発足時の事務局長だった会長からお話いただきましょう。

上田　ご承知の通り、札響の定期演奏会は札幌市民会館で始まり、その後厚生年金会館へ移り、更に再び市民会館へ、そして今の札幌コンサートホールへと変わりました。厚生年金から市民会館への移行には、2300の席を埋め切れないということと、音響的にも市民会館の方が良い、というような理由がありました。しかし、現実には市民会館の1500席も一杯にはできない。一方で、2000席の札幌コンサートホールの完成と本拠地化が目前に迫っているということで、札響事務局にも焦りがありました。

せっかくの新コンサートホールに移るのだから、どうしても演奏会を満員にしたいという気持ちが、事務局にも我々ファンの側にもありました。当時の札響専務理事の野杁さんと話し合ううちに、やはり、ファンを結集した札響応援団を創ることが必要ではないか、ということになりました。新しいホールで札響を聴く準備として、市民の側での努力も必要なのではないか、ということになり、初代会長さんと「とにかく活動しよう」ということになりました。準備委員会を８名前後で作り、札響くらぶを発足させようと活動を開始したのが、今から12年前ということになります。しかし、何度議論しても話はまとまらず「とりあえずやろう、まず会報を作ろう」ということで準備号を作って呼びかけたというのが出だしです。

ファンクラブは全国に幾つかありましたが、ただ楽しむだけ、仲良しクラブ的なものでした。札響くらぶはそうではなく、良い音楽を聴くためにはまずオーケストラにしっかりしてもらわなければならない、そのためにオーケストラを市民の側からしっかり支えていくぞ、という意気込みを持って作っていくぞ、というのが札響くらぶの始まりでした。創立総会でもその趣旨に沿って、定期会員以外の市民にも札響に親しみを持って参加してもらい、札響を支える盤石の力になる札響応援団として活動をしていこう、と宣言してやっていきましょうということになりました。ですから、活動の中心は札響が大好きで札響を支援する、ファンの輪を広げるということに力点を置くこととなりました。

佐藤　しかし、発足当初というのは、その趣旨が楽員さんにも理解していただけない面があり、必ずしもスムーズに活動が始まったという訳にもいきませんでしたね。

上田　そうですね。最初の頃は「性格が良く分からない」という楽員さんの気持ちが、接触してみて凄くよく分かりました。ファン層を広げるというようなことは楽団の仕事で、音楽家は一生懸命に良い演奏をすればいいんだ、というような意識でしたね。私もその意識のギャップに驚きました。私はずっと楽団の努力は大切だが、楽員さんが市民に理解されることはもっと大切だと思っていました。ですから、札響くらぶは市民と楽員さんとのあいだの溝を埋める活動、例えば交流会で直接市民と楽員さんが触れ合いお互いが知り合いになる機会を作るというようなことがとても大切だと思っていました。しかし、なかなか理解されなくて、楽団から呼びかけてもらい、ユニオンも「じゃ、何人か出しましょう」という感じで交流会をやっても、楽員は楽員、ファンはファンと別れてしまい、交流になりませんでしたね。お互い慣れないこともあって、最初１・２年はそんな感じでしたね。

西川　今思うと、私が札響くらぶの活動に最初に参加したのは、平成８年12月のNSSビルで総会・交流会があるよ、ということが新聞に載って、それを見

ていったのが最初でした。そこで「ああ、こんな活動もあるんだな」と知り、こんな身近に演奏家さんの話を聞け、こんなに近くで演奏を聴くことも初めてで、いいもんだなあと思いました。それで、翌年には盤渓幼稚園での交流会があり、当時札響事務局次長の吉田さんがアルペン・ホーンを吹いて下さったりして、楽しかったなあという思い出があります。

佐藤　その最初の頃の交流会というのは、札響くらぶ主体というより、事務所がお膳立してくれてやっていたとという感じでしたね。その札響くらぶの活動を大きく変えたものとして「札響くらぶコンサート」の開催がありますが、これについては。

上田　１年半の活動を通して、結局一部の楽員さんとの交流にとどまり、楽員さん全体との交流という所にはいかない、一方で、我々は楽員さん全体と交流したいと思っていました。それじゃ、我々が演奏会を主催してやろう、という所に話がいきました。楽団はすぐ「いいでしょう」ということになったのですが、楽員さんとの合意も得なければならないということで、どんな性格とするかなど、私が窓口になってユニオンと話し合い、合意して覚書を交わすという手続きをとりました。最初は「札響の鉄人達」というようなタイトルで、超絶技巧を要する曲を選んで演奏してもらい「札響にはこんな凄い演奏家がいるんだぞ、札響はこんなに凄いオーケストラなんだぞ」ということをアピールすることが大切だ、と思っていましたが、えらい反発を受けまして「個人を目立たせるコンサートをやるのか」という楽員さんもいました。我々の真意を縷々説明しましたが、なかなか納得いただけず、結局その企画はつぶれました。それで、覚え書きの中で「札響くらぶは楽員個人を応援するものではなく、楽員全体を応援する」というように明記し、今では考えられませんが、それでやっと話が進み始めたという経過をたどりました。

佐藤　出だしはちょっとぎこちない所もありましたが、でも、今から思うと会員数を増やす上においても、このコンサートは非常に大きな力になりましたね。

上田　札響くらぶコンサートのコンセプトの一つに自分達でチケットを売る、というのがありました。ただプレイガイドで売ってもらうのでは活動にならない、当時200人くらいの会員でしたが、会員一人一人がチケットを売ることでファンを増やし、札響を議論するきっかけにしようということで第１回目をやりました。すると意外、ほぼ目標を達成できました。一方で、無理やり押しつけるようなのは、という不満の声もありました。で、無理をせずに、という方向になったと思います。２回目以降をどうするかについて大激論になり、アンサンブルでという意見もありましたが、「覚え書き」の件もあり、同じような方向でということになりましたね。

西川　第１回の時に当時の上田事務局長に言われたのは「これは運動だ、手売りで札響も元気づけたいし我々札響くらぶも元気になりたい」ということでした。普段定期演奏会に来られない層をいかに結集していくかというテーマもそこにありました。そういう意味で1600人を動員したということは大成功でした。また、札響くらぶの今後について、いつも定期を聴いている層以外のファンを結集していく役割というのもあるのかな、ということを当時感じましたね。

上田　第１回をやるまでに３年かかったんですね。

西川　これは最初からの計画だったんですか。

佐藤　元々は、盤渓での交流会の時のアンケートに私が「札響くらぶ独自のコンサートはできないか」と書いたのが、スタッフ会議で取り上げられたんです。

上田　なるほど、そういう仕掛け人がいて、乗りやすい事務局長がいたということですね。（笑）

西川　そんで、そのお鉢がこっちに回ったということなんだね。（笑）

佐藤　結果として７回で中断していますが、さっきも触れられていたように、普段コンサートに来られない人、子どもやお年寄りというような方々をターゲットにして、それが結果的に今のファーストコンサートの開催に繋ったりしている訳だから、札響にも社会的にも大きな影響を与えたことは事実だったと思います。

鈴木　「親子券」というのを最初から作ったということですが、なかなかコンサートには一緒に行けない親子連れには良かったと思います。それも親子で2500円という価格も好評でしたね。

上田　それと、何らかの音楽活動をしている高校生200名を無料招待しましたね。この生徒達は将来必ず札響の大切な聴衆になってくれるだろうということでしたが、これなんかも良い発想でしたね。

西川　「指揮者にチャレンジ」のコーナーも好評でしたね。子どもも大人も夢中になってね。今ではいろいろな所で一般的なイベントみたいにして行われ

ていますが、あの当時、本当に指揮者の理解がなければできないことでしたね。よくやれたなと思います。それと、あの頃子ども向けのコンサートというのはなかった。「アリとキリギリス」をやった時なんか子ども達が物音一つ立てずに聴いている姿を見てつくづくいいなと思いました。大人よりもマナーがいいんだもの。飯森さんの時でしたが、何回目でしたかね。

上田　１回目は渡邉一正さん、２回目は尾高さんでしたね。

佐藤　３回目は青島広志さんで「新世界より」でしたね。

武藤　４回目が飯森範親さんでしたね。

西川　その後は２回連続で西本智実さんでしたね。いやーとにかく、完売、完売ですもの２回とも。

佐藤　あの人気にはびっくりしましたね。

西川　びっくりしたねー。とにかく札響くらぶ会員でなけりゃ駄目だというので、大阪から東京から、凄いんだもの登録者数が。今になって思えば、さっき佐藤さんも言っていたけれど、このコンサートは、現在行われている様々なコンサートの先駆的な役割を果たしたコンサートでしたね。

上田　そうですね、今じゃ札響の定番になっている「子どもの日コンサート」も前に我々がやっていたのを、「これは良いものだ」というのでやっていただけるようになりましたし、札通でやっているコンサートなんかも、時期的なものなんかは札響くらぶコンサートの後を受けていると言えなくもないですね。「指揮者に挑戦」みたいなものもポピュラーになって、楽員もこなれてきたというか、一番大きいのは、コンサートをやっても楽員はどことなくよそよそしかったのが、一緒に音楽を楽しみましょうという姿勢になってきたのは特筆すべきことだと思いますよ。

佐藤　楽員の姿勢変化という面で言うと、二つの大きな要因がありましたね。一つはこの札響くらぶコンサートの開催による楽員と聴衆の関係の変化。そしてもう一つは、いわゆる札響の危機ですね。あれから、楽員さん達の意識は、劇的にがらっと変わりましたね。

鈴木　そうですね、あれは大きいですね。

上田　私も財政再建計画の段階でちょっと関わりましたが、楽員にも待遇面での犠牲を求めざるを得ないなどの現実に直面し、楽員さんも「ただ演奏をしていれば良い」という姿勢では駄目だという気になり、以前から我々が主張してきたような在り方にならねばということに気づいたのでしょうね。いつもファンに正面から向き合い「一緒に音楽を楽しみましょうね」という姿勢なしにはオーケストラはやっていけないということを、皆さん真面目に考えるようになってくれたと思いますね。

佐藤　コンサート以外では、今札響でやっているゲネプロ見学会なんかも、我々が始めた練習見学会がもとになっていますね。

上田　我々の活動が札響の新しい試みに良いヒントを与えてきましたね。決定的なのはファーストコンサートですがね。私がたまたまこういう立場になって始めさせてもらいましたが、これが補助金カットはしたもののそれを越えるものになったと思います。２年目からは札幌だけでなく、石狩管内の市町村の子ども達にも広がり、札響の財政を大きく支えていると思います。

佐藤　毎回尾高さんと高関さんがやって下さって、彼等もそういう所に非常に理解を示してくれていると思います。適当に若手の指揮者で、なんてことはありませんものね。

西川　きちっと本物やってるもんね。安かろう悪かろうじゃなく一番いいものをやっているもの。

上田　楽員さんにも刺激的で、こういうことをやっていかなければ駄目なんだということを意識化することに役に立っていると思いますね。更に、最近の札響くらぶの活動としては、西川さんが提案された「楽譜支援」なんかは定期会員ではないけれど札響大好きという人々が、具体的に札響を支えていると自覚できる良いアイディアだと思います。

西川　札響の危機の時に札響さんといろんな議論をさせてもらいましたが、その中で札響くらぶ会員の中で定期会員が３割ということに対し「少な過ぎるのでは」と言われました。私は「だから札響くらぶの役割があるのじゃないの」と常に言ってきたんです。定期会員にはなれないんだけれど札響を応援したいという層を組織化し、札響を応援していくことが大事だなあ、と思っていたものですからああいう提案になりました。でも、私が札響くらぶに関わった頃で会員数が250、つい最近700名を突破しましたが、定期会員数が三割から三割五分というのは変わらないんです。ということは、会員に占める定期会

員の数は着実に増えているということなんです。だから、札響くらぶの会員が増えるということは、確実に定期会員も増えるということになると思います。

武藤　今回、会費納入時に楽譜支援の寄付金も納入していただきましたが、その中で、「札響を支援したいと思うけど、個人ではなかなかできず、さりとてパトロネージュでは負担が多いので、この制度は有り難い」というようなことをはがきに書いて下さったり、電話を下さったりした方が結構いましたね。本当にうれしいことで、そういうのが札響くらぶの活動の本旨になるのかなあとも思います。

上田　本当に音楽が好きな人にとって、自分の町にオーケストラがあるというのは無上の喜びだし誇りでしょうね。そのオーケストラを派手に応援するか自分の力の及ぶ範囲でささやかに応援するか、いずれも大切でしょうが、札響くらぶはささやかな方をゆるやかに楽しく、これからも和気あいあいでやっていきたいですね。

西川　私が事務局長になったのが平成14年、会長になる上田事務局長の後を受けるということでした。そうしたら翌15年、会長が札幌市長選に出るという寝耳に水の話で、当選されたのは結構なことでしたが、一時は「札響くらぶはどうなるんだろう」と心配したこともありました。

上田　いや、市長が会長になるというのは望ましくありませんが、会長が市長になるというのはいいんじゃないですか。(笑)

佐藤　そろそろ時間ですので、過去だけじゃなく、札響くらぶの今後についてお話いただきましょう。

武藤　私この中で一番浅い会員歴なんですが、２年目頃から事務的な面で西川事務局長のお手伝いをするようになって、徐々に札響くらぶの内情も分かってきました。その中で幾つかのことを考えるようになりました。一つは外に対して札響くらぶをいかに知らしめるのかということです。それで、ホームページを作らせていただきましたが、それが意外に効果がありまして、新規入会の200名近くがホームページを通しての申込みでした。次には、退会者に関しては、高齢のためなどの理由以外にメリット・魅力がないというのがあります。これについては、札響くらぶコンサート再開をできないでいるということが影響しているのかなと思いますので、札響を知ってもらうということも含め、最初はこれまでのような大きなコンサートにはできないかもしれませんが、何とかして再開しなければいけないな、と思っています。それを始める役割は、事務局長という立場の私が担っていかなければならないのかな、と思っています。とにかく札響くらぶコンサートを復活させるということを、当面の自分の最大の仕事としてやっていきたいと思っています。

上田　いいですね。「自分の責任で」なんてこれまでにはない発言だよね。(笑)

武藤　自分の時代にとぎれさせてしまった、ということもありますし、今は札響事務局との関係も非常に上手くいっていますので、この時期に何とか筋道をつけたいと思っています。そのためにも、悲願である会員数1000名を達成する努力をしたいと思います。

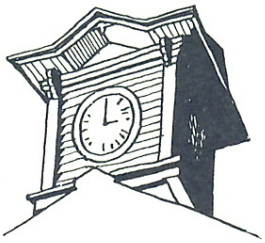
西川　私は、事務局長を武藤さんにお願いして副会長になって、全国のオーケストラのファンクラブとの接触に努めてきましたが、その中で、札響くらぶのような応援団を持っているオーケストラというのはそう無いんだな、ということがよく分かりましたね。副会長にさせていただいたのは、札響くらぶの名前で外に打って出て、全国のファンクラブとの連携を作りあげたいということでした。一昨年「山形宣言」というのを作り、札響、山響、仙フィルの応援団が手を結んだのが始まりとなり、昨年、群響、広響の応援団の皆さんも加わって、全国の組織を発

足させることができました。あわせて昨年は、全国音楽ボランティアフォーラムにも札響くらぶとして参加しました。今年に入ってからは、札幌芸術文化フォーラムというのも立ち上げました。こういう横の広がりを、今後の札響くらぶの活動に生かしていければと思っています。

鈴木　今までいろいろな活動を行ってきて、札響に様々な影響も与えてきたと思います。でも、コンサート、交流会、会報などみんなで力を合わせてやってきた活力が少し衰えているかなと思います。スタッフも増やし、活力復活を目指しましょう。

札響物語 39

500回定期を迎える札幌の街（その１）



札幌交響楽団第500回定期演奏会が６月23日(土)24日(日)の２日間札幌コンサートホールKitaraで行われた。第１回創立披露定期演奏会から楽団員としてステージに上がった一員としては改めて大きな感慨が胸をよぎった。

また、創立時から札響の演奏を聴いてきた人達にはこの演奏をした札響が46年前の札響と同じオーケストラとは信じられない思いだったに違いない。日本に数あるプロのオーケストラの中でも札響は常に上手いオーケストラと言われてはきたが、第500回定期での「復活」は他のオーケストラの演奏会ではおそらく経験出来ないほど聴衆と演奏者が一体になった熱い演奏会だった。

500回、通過点とは言え大きな節目である。振り返ってみると札響を取り巻く環境も大きな変遷を遂げてきた。初代常任指揮者故荒谷正雄の下で行われた第１回定期は1961年９月、今年３月末でクローズした札幌市民会館だった。この年豊平町が札幌市へ合併され「60万人都市」が目標だった。札幌は大通り公園を中心にアカシア並木の北一条通りが美しく、空の広い穏やかな素敵な街だった。私は札幌へ来て間もなく市内観光バスに乗ったことがある。まだ、道路は穴ぼこだらけで、ガイドさんの言葉は「皆さんを歓迎する札幌のえくぼです。ご一緒にお楽しみ下さい」だった。初めて迎えた札幌の冬に道外から来た団員は悩まされた。なれないつるつるの圧雪道路、その上に自動車が作った轍がくせもので、気を付けて歩いていても何かの拍子に足を滑らせて楽器のケースを道路にぶつけ金管楽器奏者は度々楽器をへこました。

第100回定期は、第２代常任指揮者故ペーター・シュヴァルツの下で、1970年11月にブルックナーの交響曲第７番を札幌市民会館で演奏した。２年後に冬季オリンピックの開催を控えた札幌は、急速に開発が進められていた。人口は100万人の大都市になった。市民会館の隣にあった創成小学校は移転し、その跡に当時市内で最高層のビルだった現在の札幌市役所が建設中で、タイヤ方式の地下鉄南北線の開通も待たれる頃だった。

［続く］

（竹津宜男）

from 「札響くらぶ」

今年度初の交流会開催

会員の皆様には既にお知らせしておりますが、今年度最初の会員と楽員の交流会を下記の通り開催いたします。

日　時：2007年９月22日(土)　午後５時30分から（501回定期演奏会終了後）
場　所：札幌コンサートホール・キタラ　２階大会議室
会　費：1,000円

当日は、楽員さんを始め音楽監督の尾高さん、事務局職員の皆さんにもご参加いただける予定です。当日になって出席を希望される方は、札響くらぶカウンターで参加可能かどうかをご確認下さい。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　トロンボーン副首席奏者

山下（やました）　友輔（ゆうすけ）さん

ご出身は

鹿児島です。高校を卒業して、東京芸術大学に進学するまで鹿児島で育ちました。

トロンボーンを始められたきっかけは

小学校４年生の時に、２歳下の妹が吹奏楽部に入ることとなり、「それじゃ僕も」と便乗して入りました。楽器を選ぶ時、何かの機会にトロンボーンを演奏している姿を見ていたのでしょうね、「格好いいなあ」という思いがあったので、自分から希望してトロンボーンを始めました。

トロンボーンの魅力は

オケの中では、他の楽器に比べて演奏する時間は少ないかもしれませんが、少ない分だけ一つ一つの音が曲の中でも大変重要さを持っています。ですから、パート全体で一つ一つの音をいかに美しくハモらせるか、ということに全神経を集中させることができることです。一般的には、大きな音を響かせる楽器というイメージを持たれていると思いますが、コラールのように、小さな音でのハーモニーをぜひ聴いていただきたいと思います。

札響との関わりは

大学４年の時に学内のオーケストラをバックに私がソロを吹く機会があり、その時に尾高さんが指揮でいらっしゃってお目にかかりました。その後札響の東京公演があった時に、本番は聴けなかったのですが、ゲネプロを聴かせていただく機会がありました。その時に、今までに聴いたことが無いような弦の響きだとか、新鮮な感じで聴かせていただき、ああ、凄いオケだなと思いました。大学卒業直後にオーディションを受ける機会を与えられ、今年５月に正式に入団しました。

入団してみての印象は

思っていた通り、オケの皆さんが凄く優しくて、みんなで頑張っていこうという雰囲気があります。活動では、特に旅が特徴的だと思います。エキストラの時期を含めて、栗山、函館、釧路、網走、稚内他、北海道内あちこちにいきました。長距離移動となりますが、ドライブが好きなので苦になりませんし、楽しいですね。

北海道での生活はいかがですか

何と言っても、道が広くてまっすぐで、運転していても楽しいですね。趣味としては、ドライブや映画鑑賞です。家にちょっとしたオーディオ装置をセットして、DVD などを楽しんでいます。

食べ物はどうですか

美味しいですね。特に刺し身など魚介類は抜群です。鹿児島では、きびなごの刺し身というのは有名ですが、あまり刺し身とか鮨を食べるような機会はありませんでした。北海道に来てからは鮨を食べることも多くなりましたが、今は鮨について勉強中です。どの季節に何が旬なのか、鮨に乗っている魚が何という魚なのか、というようなことがさっぱり分かりません。どうせ鮨を食べるのなら、そういうことが分かって食べたら、より美味しくなるのではと思いまして。

今後の夢とファンに一言

ソロのリサイタルを、札幌だけではなく、東京の人にも忘れられないよう、東京でもやってみたいですね。まだまだ未熟ではありますが、一生懸命演奏していますので、演奏会に足を運んで下さり、頑張っている姿を見ていただければと思います。

（佐藤良次）

from 「札響くらぶ」

全国プロオーケストラファンクラブ協議会総会開催

昨年、札響くらぶが呼びかけ、札幌で設立会議を開催しました、全国プロオーケストラファンクラブ協議会(JOFC)の第１回総会が、９月29日(土)に仙台フィルハーモニークラブ主管で仙台市で開催されます。各ファンクラブからの活動報告やJOFCの活動方針の審議などが主な議題となります。

札響くらぶからは、現在のところ上田会長を始めスタッフ・会員の約10名程度が出席の予定です。

当日は仙台フィルの定期演奏会の二日目に当り、15時から常任指揮者のパスカル・ヴェロ氏の指揮でベルリオーズ「幻想交響曲」などを鑑賞し、総会会場となる「ハーネル仙台」に移動し、17時30分から約１時間半の予定で総会が行われます。総会終了後、同じ会場で19時から21時の予定で懇親会が行われます。懇親会にはヴェロ氏や仙台フィルの楽員さんも参加して下さる予定で、きっと和やかな会になることと思います。

30日は、参加者各自で仙台や松島の観光を楽しみ、帰路につきます。総会・懇親会の内容などは、次号の「札響くらぶ」でお伝えできると思います。

楽員さん出演の演奏会ご案内

◆トリオ・ダンシュ札幌 vol. 6

日　　時：2007年９月28日(金)　午後７時開演
場　　所：札幌コンサートホール・キタラ　小ホール
料　　金：一般 3,000円　高校生以下 1,000円（全席自由・税込み）
出　　演：宮城完爾(Ob)　三瓶佳紀(Cl)　坂口　聡(Fg)　　ゲスト：青島広志(ピアノとお話)
曲　　目：モーツァルト／木管三重奏のためのディベルトメント第１番
　　ミヨー／パストラーレ　イベール／トリオのための５つの小品
　　青島広志／唱歌の12か月
チケット発売所：
　　キタラ・チケットセンター、チケットぴあ、ローソンチケット、大丸プレイガイド
　　道新プレイガイド、４プラプレイガイド、JRツインクルプラザ、イープラス

◆2007「文学館ロビーコンサート」

日　　時：2007年11月４日(日)　午後６時30分～８時
場　　所：北海道立文学館地下ロビー（中央区中島公園）
料　　金：1,500円（文学館会員1,200円、学生1,000円）
出　　演：大平まゆみ(Vn)　廣狩　亮(Va)　廣狩理恵(Vc)　他
曲　　目：ドヴォルザーク／弦楽四重奏曲第12番ヘ長調「アメリカ」
　　ベートーヴェン／弦楽四重奏曲第９番ハ長調「ラズモフスキー第３番」
予約方法：10月18日から電話で予約受付をします　TEL 011－511－7655　入場定員は60名です

編集後記

平成10年10月発行の第６号から10年間、「札響くらぶ」の編集長を務めさせていただきました。区切りの40号を編集し終ったところで、新編集長の松尾英樹さんにバトンタッチすることにしました。

10年間には様々なことがありましたが、年４回発行というペースは、多くの皆様のご協力によって、何とか守り切ることができました。

創刊号から変わることのないスタイルで発行し続けて参りましたが、新編集長のもとでスタイルも一新され、より愛される会報になってくれることを期待しています。今後も、取材などで協力して参る所存です。

楽員さんや事務局などご協力頂いた方々、ご愛読下さった会員の皆様に、心から感謝申し上げます。　（佐藤良次）

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終ったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は07年12月発行の予定です。